

## 夢再び

## モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

1990年代前半の調査と比べて「劇的」とい言葉がぴったりの変化がある。それはGPS（衛星利用測位システム）である。たかだか数万円の携帯機器で、自分のいる場所の緯度、経度、標高が数分の誤差範囲で特定できる。

二十数年前はこんな夢のようなことが実現するとは思っていなかった。90年代初めには民生品が発売されたが、1台50万円以上して、一人一人が携帯できるような代物ではなかった。当時は、広いゴビ砂漠のある地点にたどり着くには、モンゴル人ベテラン隊員たちの驚嘆すべき土地勘に頼っていた。

私たちから見るとゴビの地形はほとんど平らでこれといった特徴がない。しかしベテランたちは遠くの山並みのうねり具合やわずかに突出したピークの形、進行に合わせて見え方がどのように変化するかなどを正確に覚えていて、ぴたりと目的地に行き着くのであった。日本人には到底まねができない。私は彼らを「歩く地図帳」と尊敬していた。

しかし、土地勘は旅行には役立つとも産地データを第三者に説明する資料にはならない。また継承しにくい。それに大量の化石産地のデータは地形図に落とし

## ⑧ GPS、便利だが…



## 化石の盗掘者が悪用も

込むよりほかないのだが、そもそもモンゴルではこの地形図がきちんと整備されていないのである。

林原―モンゴル調査隊の大きな成果の一つは、GPSを活用してモンゴルの主な化石産地の緯度、経度をデータ化したことである。これは産地保護や学術基礎データとして活用されている。産地のデータを入れたGPSの指し示す方角に、

砂漠をどどん行けばいつかは目的地に着けるのだ。ずいぶん楽になった。

また、GPSは広い産地での位置決めに役立つ、発掘のスケジュール作りに大いに貢献した。化石が見つかるとその場で掘り続けたいのだが、夕暮れで中止せざるを得ないことがある。「明日、続きを掘ろう」とつぶやいて、石を積んだり赤いテープを風にはためかせて目印とする。そして翌日、現場へ戻ろうとするところだったか分からないことが時々あった。積み石が崩れ、テープが飛ばされたらなかなか分からない。こうして記憶のはざまに消えた発見がいくつももあった。いまはGPSの記録を取るのでもそんな口又はなくなった。

しかし悪いこともある。

モンゴルには化石の盗掘者たちがいる。地形や地質のプロではないはずの彼らが、場所を違えることなく盗掘を繰り返るのはおそらくGPSを活用しているのだろう。

ピタリと決まる正確さはいろいろな使われ方をするので、研究者は気をつけなければならない。

(岡山理科大教授)

＝ 随時掲載

GPSとハンドロサウルス類の足の跡(ひ)骨。化石は必ず緯度、経度を記録する